



百五十一番  
合



やう解山  
力年指不

五列のし  
木このせ

生好

小序



いあーいさ歌あさむ句台と  
かえさるるかへき判若きさるる心  
云葉花色乃境まらるるよ心の  
あふ乃物よよ海まを極るる心  
ふえ今後よいさ百廿十番は  
句台ハ只まらるる心  
り折の物まらるる心

組あせそ阿ふらよあせそ  
くも阿ふらよあせそ  
あせそくも阿ふらよあせそ  
梓よの白世普く世よ雪門の  
風あそとそふ人よ家と價を  
竹よの如明和元年冬嘉月

書林生白堂述

歳日

夕言とより一枕乃舟の春 暮夕太  
山風乃門より風より松乃云 吐月

新歳

新歳や松より切る事二人は 月  
万さのや安八橋と礎て外 太

人日

新水たるとく揃りく暮夕太  
わらから世のちるなるあ常病 月

梅

棠垣の葉に吹く梅のたれ  
梅の香は春の中をむく水の水

春

うさひまの啼きよふ隠し  
春や耳を障あふうさかな

柳

それわくはるも柳と梅の  
ゆかりのさし水はもよき柳うね

風

里わりと空をくまういの  
春のそよ風はくまう風の中

春

亦うさひまを汲て捨る春の  
清き水は春のそよ風はく

春

春のそよ風はくまう風の中  
春のそよ風はくまう風の中

月

太

月

太

月

太

月

太

月

太

月

太

白菓

あゝ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや  
白菓やあ〜うやあ〜うやあ〜うや

太月

海苔

あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや  
あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや

太月

春雨

あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや  
あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや

太月

猫

あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや  
あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや

太月

臘月

あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや  
あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや

太月

接穂

あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや  
あ〜うやあ〜うやあ〜うやあ〜うや

太月

太月

江繁

祢ちんまや月の兔ハ月くわん  
横もろふ常ぬまわり江繁像

太月

蝶

林ましの身と風とく江繁  
流もろふ二葉れゆふ江繁のれ

太月

菜花

菜花もや朝日夕日の家あふ  
鳥吼と大や常横入むおれく

太月

椿

鶯れ又燕かへま家ははちま  
茶葉も一輪おれ江繁のふ

太月

香露

花てく高れちくや水車  
香露も平水の露あふ香露のふ

太月

雛子

端もろふの尻立ちる雛子  
口も寸入るまわち出て雛子の勢

太月

約言

如

雲雀

那と豊の地いよし雲雀の  
秋のささく空の居る心も

太月

小芽

小芽麻乃角ハ糸一て小芽  
人知くさあわさあ小芽

太月

蛙

その揚ぬゆく約する蛙の那  
似城乃さあ干ひやふく蛙

太月

燕

そら知ら化して免とはさくそ  
多影乃あ影くさる燕うな

太月

苗代

鳴きよ風のさしし苗代田  
秋風乃二葉さきし苗代田

太月

帰雁

よよよよとささよよ河の帰雁  
小向ささよよのい川かろ

太月

約

位

桃

折人と花をよもや桃の氣  
淡海やゆもや桃の碎る氣

太月

雛

うさぎの尻も卯へ雛  
浅月と桜うつらき雛

太月

出代

出りりや美人の山鏡山  
お望や美をよもや後る花を川

太月

萱

雨とよふ花もよもや萱の氣  
心とよもやのまもよもや萱

太月

海棠

海棠や花もよもや海棠の氣  
海棠や折るもよもや海棠

太月

桜

日暮るもよもや花の山さくら  
花もよもやの雪の山さくら

太月



蚕

機多し故糸がうねりしる蚕糸  
より代る乃里しく流るる蚕糸

太月

藤

まじりしと目まじりし一夜の記  
山夜巾着の逢ふ九折

太月

躑躅

鳴くはまればさうへはくは  
花多し執事さへもれは若侍

太月

春日

まは日知門川梵諦の釈法師  
春の日中茶廊くれ宇治拾遺

太月

紀

少と物多風見舟さうり花並  
白踏乃猫も捨りやむ乃旅

太月

更衣

栞のしつと掛しきし更衣  
まじりしれを香もまじりし更衣

太月

若菜

麻乃子の言ふ人言ふ事若菜山  
夕暮れ咲哉と成らぬ若菜

太月

時鳥

いとよす果派眺みして出づる  
河也よす忘る傘をさるる

太月

灌佛

聖なるる家えは川花浄堂  
衆俗も牡丹やと咲く花浄堂

太月

青嵐

帳く志海くふてゆくまほ道  
みの一此の田畑書青嵐

太月

牡丹

赤れ了法の甲く咲果ぬふらん  
掃庭中牡丹の巻れ春なり

太月

杜若

新橋ふあふり何りかまつる  
花もゆきとうりれ出るや杜若

太月

葵

お交り厚のりりて奥何るもや葉草  
種今心おぬ葉行 あつひ叶

太月

筆

こけの子心ゆりあす叶の気  
筆乃叶ふ葉叶月秋うか

太月

田植

よし女乃植さやこいひ月松  
ひわして月より淋 田植筆

太月

麦秋

旅森して知るや麦も秋の言  
麦乃穂やひりりる月く輝る雪

太月

陳敷

はさくく書葉一きりかんこ  
位人と見知り近一かんあ鳥

太月

短秋

ちりちり書場心く滑ぬ籠の葉ッ  
短秋や夕陽を確とまらるる

太月

意

粽

河洲下りの草も何りて粽の  
川風平なげく危る橋の風

太月

又月夜

山もれや傘さして守る彼れ  
浮らさく沈まありあ月夜

太月

堂

杉多路のささく遮るる傘の  
傘さしてやさるれ多路中船

太月

蚊

蚊さして後秋の里の月  
火桶の末掃灰あり蚊さる

太月

蝙蝠

蝙蝠やさく越りぬ所を  
蝙蝠やさく入る系れ捨る

太月

袖花

林のさく花さく系る花袖  
さく花のさく枝のほろ花袖

太月

郭

郭乃吾和之字入暖娥也其字以  
誰之作，常一之付一其郭

太月

粉烟

山河然湯一てしる粉也  
月影之影人て無る粉烟也

太月

菴菴

菴菴也縁雨もさす以りら  
菴菴也其心もさすと其もりら

太月

若楓

若楓其心も酒乃以りら  
若楓其心も酒乃以りら若楓

太月

今年竹

竹之さしは其心も酒乃以りら  
其れに競く今年竹

太月

河骨

河骨也其心も酒乃以りら  
河骨也其心も酒乃以りら

太月

苜蓿花

何れりて咲ても梅一葉の花  
賽の跡に都乃言や昔の心

太月

蓮

白蓮下人影さる秋の心  
月一葉の白く咲る草の中

太月

田舎歌

拙てし草の心も里や田舎歌  
心は昔の心も昔の心

太月

蟬

辛味や日乃入まての蟬一本  
牛とあつて高きりては蟬の心

太月

夏歌

むくむく心もむくむく心  
夏歌の心もむくむく心

太月

晒

夕刻の心も晒し心  
ひくむの心も晒し心

太月

夕

翡翠

うらやまや河を懐く思ふ  
翡翠や唯の幸は盡く川

清水

まじりたる水は清く  
京中は速く保せし清水の乳

竹奴人

綿繻くかぬ襦や竹奴人  
曉と小町、骨や竹奴人

涼

門風乃人を懐くや夕暮  
竹城の花は夕暮涼

凡

市中は暮る水字や凡  
ふらふらと暮るや凡の字

御後

あつた御後  
夏の流る水は流る御後

太月

太月

太月

太月

太月

太月

立秋

すのりれいし芽は揃ふもや今羽秋  
の露を淋しきるもこれの秋

羽秋

朝影や山にけし木上起るひ  
あさるや日教と海と森の奥

七夕

星よ琴のかりそえの瑞花を  
かきとや空へ一柱のこころを

秋風

あき風やお舟の波のまは帆片帆  
秋風を伝和のの一葉より

榴毒

榴はくちや暑く漏りて夜の実  
あきまやあま人はの留守は夜

角力

長波の都は守角力くし  
あきしう角力くし角力く

太月

太月

太月

太月

太月

太月

太月

太月

太月

太月



盆

は家の中 懺つてええとてお祭  
るのたの灯をえとて一魂をう

太月

踊

恋とよれ舞うてめぐる踊り  
お祭一人まがなひくときりし

太月

芭蕉

七堂のふと大破れをぬき  
あまもれいこのちをさぬと芭蕉

太月

花野

個てて又罪つくるも野分  
あゝ神々けけりるを妙に

太月

鶉

赤紅くも鶉の忘れぬわらう  
そのくさき鶉の神と鶉の乳

太月

虫

むーやや傘さすりあるを  
酔のちの写すくうまは虫のち

太月

萩

輝く春よおしお人何くもえ萩の香  
萩の神や心の手紙のつらき花

太月

萩

是は海くつし中し神はたより萩  
よ〜萩の果をまきわら玉川

太月

萩

くつし神や水と神をいづはし  
初冠や秋の萩もあはれと

太月

女節花

おあそ人よ秋の萩もあはれと  
萩の萩乃中し萩もあはれと

太月

萩

萩の萩乃中し萩もあはれと

萩の萩乃中し萩もあはれと

太月

雁

あわ〜えと萩を〜小田の雁  
二羽く〜萩〜萩〜

太月

待宵

待宵や こそらくく女帝を  
待宵や こそらくくき風の俣系

名目

夏こそらくく海ふ家あつきの月  
月ふゆき月よ神山の入松

十六夜

十六夜のや 雲く降る 藤あき  
十六夜や あくく一松の逢橋

落

落しゆく 我と風と落しゆく  
林こそらくく部くゆく落しゆく

野合

合屏く 雨吹く 雨ふく 雨  
傘 下 部 の 雲 雨 雨 雨

桑山子

桑山子 桑山子 桑山子  
いふ家の云人 桑山子

太月

太月

太月

太月

太月

太月

流水

月細くおぼろしくしてほろり  
田の虫は田の雀と添水に

太月

碓

播し秋のふらふらとせよ福水  
きし里の秋よせよあつた

太月

蕎麦花

山畑中におぬきやけりる花  
あなも又ゆるゆるのそよ風を

太月

葛

橋へはらへるそのあつたつ  
一蔓の海村へ思ひもよみ

太月

萩

えい〜〜種くやせやう紅の萩を  
海舟の園は萩へ戻る夜を

太月

菊

菊の日やち〜ぬ夕のけしき  
〜〜菊の心はま〜〜

太月

瓢

うかくとまぎる花のわら瓢  
一町のまゝらゝに粒々

太月

十三款

於糸とらまをたお河の後の月  
吸玉釣ぬらゝ地河の存世丹

太月

麻

あゝぬらゝらゝらゝ麻のあ  
麻のまゝや取らゝあぬ妹育山

太月

未枯

うゝ枯や厚のゝ汲水車  
未枯やあぬらゝあぬ未枯

太月

林書

船碎く海とらゝらゝ林の書  
眠るゝと横らゝらゝ橋や城れらゝ

太月

落水

うゝ橋のゝす河のゝ落水  
外あゝらゝ河のゝ落水

太月

紅葉

香の気もも自傳ふへ五葉花  
はつとさし新ふふ河じもさか

太月

新秋

ましくと小田り枯り蹄  
ゆく秋やきと植ま屋のいとし松

太月

小春

ふとくい戸も愁乃多ふ小春  
静く居る柳いさあや中あうふ

太月

時雨

いろえぬ皇腐も雨ふる秋ふ  
植まうし松と志のくや初し

太月

口切

口切や若乃價もこの綿  
口切やふれあふら客あり

太月

水仙

是しき四阿屋いし水仙  
傾城のきく六伝きし水仙

太月

遠摩忌

遠摩忌也本急も亦てふちの  
遠く名や字はくは素は日より

十歌

太月

福中たあも限くぬ十歌は  
福舎は其のぬのふ十歌は

為系

太月

又妻のあもこのふもあ系  
おと海き目おししる系

太月

乙蕨

乙蕨このあもくやる蕨の  
淋しこの目おししる蕨は

太月

死考

死考は災や皆乃たひり  
おし考や考は考は考

太月

枯柳

枯柳の版しけり系  
枯柳の版しけり系

太月

降花

爰より似たりしはしらし改花  
木のうらうらまらりかつり蘇

太月

火桶

惟えん子言ひたぬ火桶  
ふかきおの官女の中北火桶

太月

霜状

持守一掃を刷りてまら秋  
何様中一掃を刷りてまら秋

太月

冬籠

翁子月秋をこして冬あがり  
房中一掃を刷りて冬籠

太月

千巻

漂ふよのちまよのちまよ  
次くもも蘇のうへりちりね

太月

網代巻

彼月一巻をこして網代巻  
我家の巻をこして網代巻

太月



亦枯

おのゝしや淋田白まは月獨  
風や去るも巻入るのさり雲

太月

枯地

いしり家月了る為は枯地  
牛の尻のわが動ぬ枯地うふ

太月

干菜

都るの端乃喜の干菜うら  
我とわたり母系よたぬ少家也

太月

飯

飯汁や早うらうまて喰るは  
寝汁や喰るはつらまきまの

太月

紙衣

西川く矢のうかぬ紙衣が  
早うは管袖いもなうて御衣も

太月

海氣

船の中はまきご無きは海氣が  
帆よりものまきりたう海氣も

太月

鶯鶯

あも又一葉よあしりささる  
買くもいふまじの河り鶯鶯

路中

富いとの神く出て路中れ  
妹よりう風路路る路中れ

鶯鶯

いほもや路くも新も葉の水  
能くややあゆはれおのあ

鶯鶯

あなとさやあはれひとの首井は  
うゝとや一もいさる肩うあ

神鼓

像ふよの勢のしほし神を義  
あ乃数の又百せしやたら鼓

巨燵

新徳の其くさ路向ふり水  
死くもく嘘はいてある巨燵

太月

太月

太月

太月

太月

太月

氷

漳子張の縁に水の中を水  
引のちぎれておる水くふ

雪

訪うせんとまきまき河の氷  
さきさき川を氷轉りひの川松

氷粒

一粟をくく入日乃氷粒の如  
く氷粒の如くく、河の氷粒

太

月

月

太

太

月

暖鳥

風をぬく海の水を暖鳥  
放す水に八幡祈るうぬぬ鳥

寒

氷の角うなまをさすうのまうぬ  
あしをさすうなまをさすうのまうぬ

茶喰

温純よりいふ川をさすうのまうぬ  
友猿をさすうのまうぬ

月

太

太

月

月

太

白

七

俳名

仙名や地獄の炭乃起る鳥  
佛名や中へ山道に信し高佛

大月

多勢

多々名や掃りて落自互  
実々名や掃りて落自互

大月

歳言

朝々好く見よはる西草遊師  
夕夕とく見よはる西草遊師

大月

戸余屋を去る

雪門俳書目録

芭蕉翁句解 蓼太述

暁花遺稿

吏流

白滝百韻 機石集

前編花三解

如雷  
夜光

鬚篋宗祇正五集 蓼太解

續其袋

古嵐雪文集  
蓼太撰

俳諧唐詩三物 雪門社中

幸崎三吟

柳波  
湖涼

蜀川夜話素世宗老庵紀并古今句拾 葛木撰

名乃宿

眠江  
蕙太

六玉川哥仙 墨繪合如雷赤羽左衛門  
南覆牛車夜光

僧都問答

雷堂

魚と水古今婦女句拾  
女野菊

躑躅行脚

山奴集

飛石ノ歌

壹夜三歌并壹見武

都雁撰

夏二万ノリ引集

桃鏡撰

芭蕉翁七部搜

莫太撰

花簞笥 正花論

白牛撰

芭蕉翁句評入  
去来湖東問答

桃鏡校

五然一具

固竹撰

百ぬくへ

後陽  
馬老撰

松乃波

後陽  
丸更撰

續夏引集

後陽  
兀子撰

老耳集

崑田塚本  
桃舟撰

新古  
芙蓉文集

後陽  
耳得撰

恋一ハ

乙兒  
莫太

芭蕉翁文集

桃鏡

俳諧無門閑

莫太撰

芭蕉翁附合集

桃鏡

月下録

花名菴極勅先生問答  
後在名居撰

百五十番句合

莫多太  
吐月

芭蕉翁寄仙  
春一ハと秋

桃鏡

芭蕉翁文集且至圖

桃鏡

ちの〜外

六花庵  
乙兒

後編花三斛

如雷

糸山立

六花菴選

凡羅画行

蓼且

虫勸進

六花菴門人  
蛙音著

俳諧棚古今人

鼠暖

しもかこ

後河女  
花夕集

景名所句拾と我

萬古  
蓼太

附合百番句合

莫太評  
杜中

芭蕉翁俳塚

同

ねろ舟

葦水  
紀行

如風

養老八詠集

後河  
麻仁

かきふ男

遠州 芦毫

俳諧通夜物語

菜路

卷中秀逸 雪のはす

桃鏡

續喜れつむ

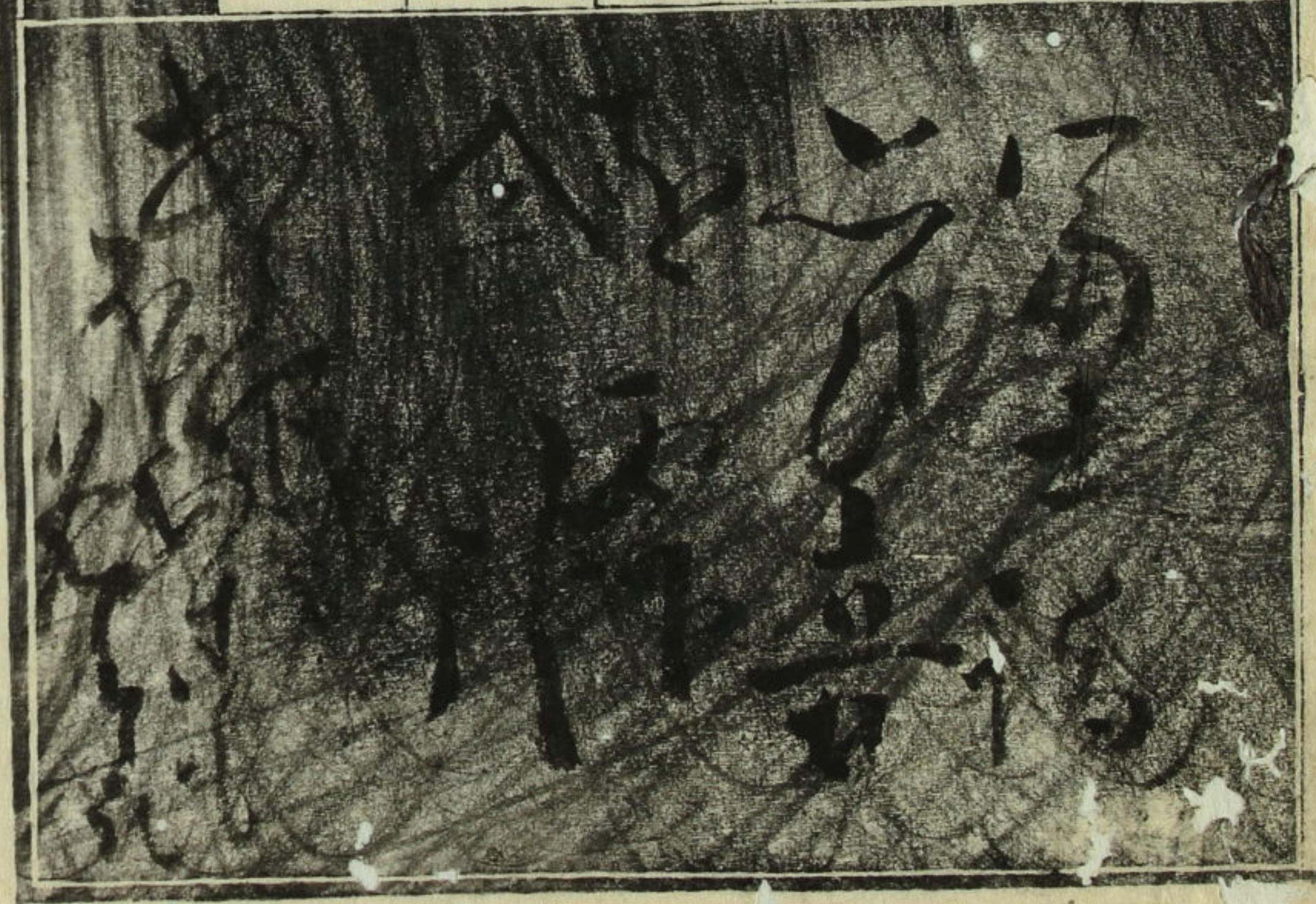
全

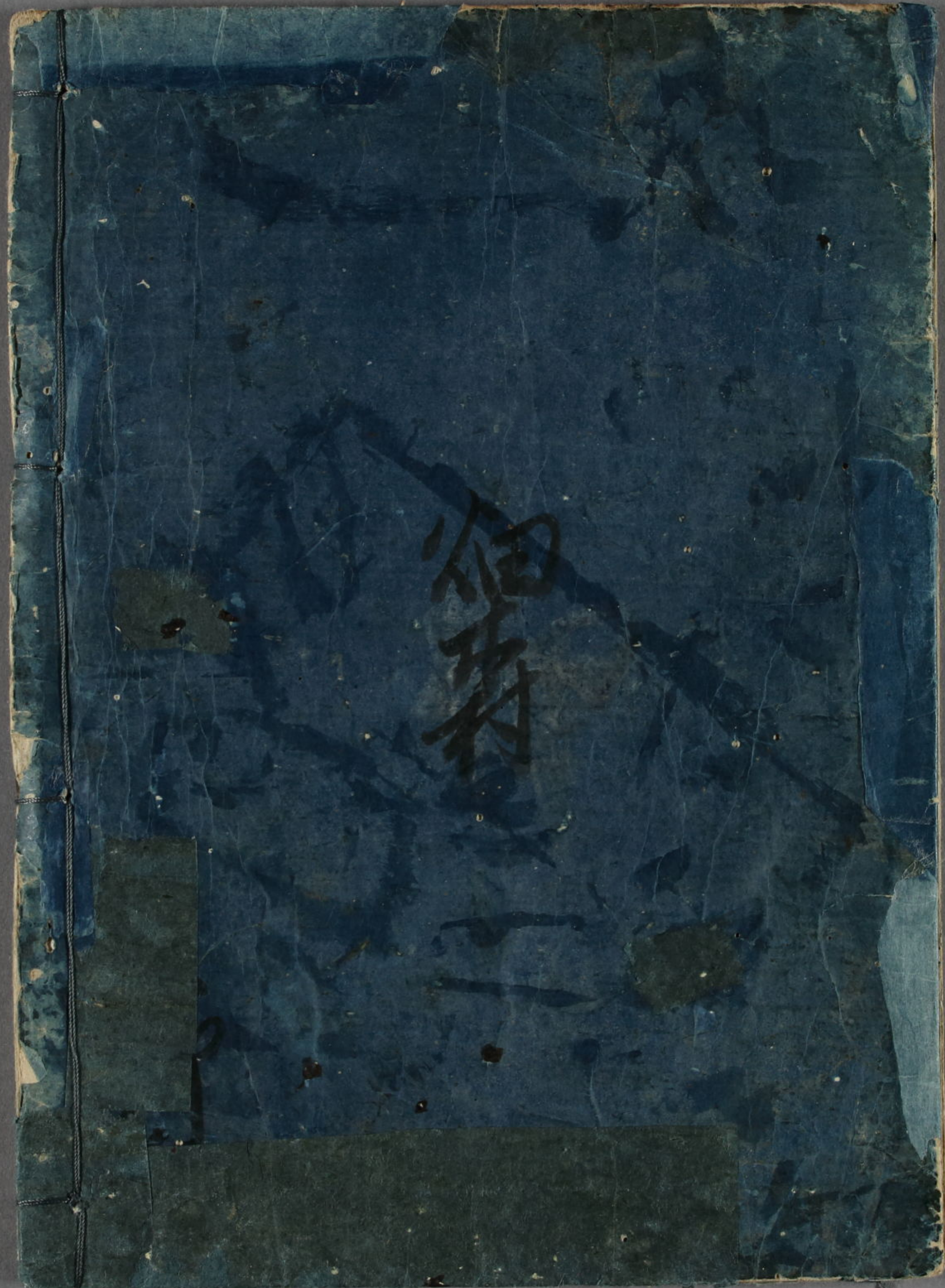
翁 具角 崑雪 三吟未來記

周竹 盤古 吐月 信実

三編宮の續

桃鏡





酒抄